

チェコスロヴァキア再訪の思い出

法学部 林 忠行

。昨年の夏、チェコスロヴァキアに1週間滞在した。大学の近くの焼鳥屋で、経済学部の宮野教授と飲んでいたとき、今となってはその細かい経緯は思い出せないが、とにかくオーストリア、チェコスロヴァキア、ハンガリーそれにイタリアを教授とともにまわることになってしまった。それ以前からチェコ・ビールの味が恋しくなっていた。また、ジブシー音楽を聴きながら飲むハンガリー・ワインもなつかしくなっていた。そんな私に宮野教授が本場のイタリア料理とワインの話をしたので、酩酊^{めいて}していた私はふたつ返事で旅行の約束をしてしまったのであろう。

もちろんこの旅行は私費とはいえ学問的な目的をもつ「研修旅行」で、その成果の一端は論文として別な場所で発表した。ここでは、今回の旅行の中から、論文には書けないチェコスロヴァキア訪問中のこぼれ話をいくつか拾って、綴ることにしよう。

私がブラハで留学生活を送ったのは1978年から80年にかけてのことだったので、8年ぶりの訪問ということになる。今回はハンガリー訪問の後、オーストリアのリンツから列車で北上し、チェコの古い地方都市チェスケー・ブジェヨヴィツェとターボルを訪れ、それからブラハに入る経路を選んだ。

チェスケー・ブジェヨヴィツェに到着したのは夕方であった。南ボヘミアの中心都市で、古いたたずまいを残すこの町は夏休みの観光客であふれていた。案の定、ホテルはどこもいっぱいであった。しかも、私のチェコ語は8年間のブランクでさびついている。小雨の降る中、不安そうな表情の教授と荷物を駅に残して歩き回り、ようやくヤン・ジシュカ広場に面するBクラスのホテルの1室を確保した。そのホテルで

両替を済ませて、なつかしのチェコ・ビールを求めて繰り出したのは7時頃のことであった。

雨はあがっていた。この国は緯度が日本よりも高く、また夏時間が採用されているので9時頃まで明るい。レストランはどこも人であふれ、席を探すのはこれまたひと仕事であった。ようやく大きなピヤホールでテーブルを確保し、ビールとサラミなどを注文し喉を潤すと、ようやくチェコに戻ってきたという実感がわいてきた。一息ついて改めて見回すと、かつて留学生の仲間たちとこの街を訪れたときに飲み明かした場所であった。

チェコのビールは日本のように全国的な大企業が生産しているのではなく、ちょうど日本酒のように様々な銘柄が各地にある。中でもブルゼン(ドイツ名ではピルゼン)のブラーズドロイ(ドイツ名でピルスナー・ウアクヴェル)は最高の銘柄として知られている。国外では、チェスケー・ブジェヨヴィツェのビール、ブドヴァルはこのブルゼンの銘柄ほど名はとおっていないものの、チェコ人にはブルゼンと並ぶ味と評されている。ちなみにアメリカの有名なビール、バドワイザーの名はこの町のドイツ名、ブドヴァイスからきている。しかし、この町のブドヴァルはアメリカのそれとは異なり、きめの細かいクリームのような泡とこくのある味をもつ典型的なチェコ・ビールである。多くの観光客が訪れるこの店はチェコとしては能率的なサービスをしていて、手際よく運ばれてきたブドヴァルのジョッキを片手に、久しぶりのチェコの大衆料理をほおばった。かくしてチェコの第一夜はすざていった。

翌日は列車でターボルに向かった。ターボルは15世紀のフス戦争でフス派(とくにその急進

派)の拠点となり、チェコ史の上でもきわめて重要な意味をもつ町である。町の名前はスメタナの交響詩「わが祖国」の第5曲(ターボル)でも知られ、この曲の旋律はフス派の抵抗精神をたたえるものとなっている。町並みはいたるところこのような歴史を刻み、何度訪れても飽きることはない。

しかし、この日から中央ヨーロッパは猛暑に襲われ、のんびりと散歩を楽しむどころではなくなってしまう。日陰を選んで歩いても汗はとまらず、やむを得ず足を止めては喉の渇きをいやす必要があった。もちろん、チェコ・ビールはいつでも喉に優しくった。

夕方、散策に疲れて宿に引き返す途中、手ごころなレストランがあったのでまだ早かったが、夕食をとることにした。ここのビールは例のブラズドロイであった。宮野教授とこの暑さを嘆きながら食事していると、ひとりの男が相席を求めてきた。入ったときは時間が早く、客はほとんどいなかったのだが、いつのまにか満席となっていたのである。

彫りの深い面立ちで髭を蓄えたこの男はしばらくするとうちとけて話をはじめた。私のチェコ語もようやくさびがいくらか落ちはじめていた。ビールが潤滑油となっていたことはいうまでもない。男は39歳の化学技師でこの町の工場で働いていた。ターボル出身とのことだったので、「この町はいつ来てもいい町ですね」といった。これはお世辞ではなかった。しかし、男は首を振りながら、「歴史ならいくらでもあるけどね、それ以外には何も無い」と呟いた。ブラハの高等専門学校を終えた彼は、ブラハで職を探したが希望はかなわず故郷で職についたという。大都市にあこがれるのはどこの国でも同じである。

話はしだいに政治にかかわる問題になった。この国も政治指導者が交替し、「ベレストロイカ」が叫ばれている。しかし、男はそれが口先ばかりで、「管理職は上がAといえばA、BといえばBというだけで、本当は誰もが何をしたらいいのかかわらないでいる」と嘆き、「今の体制では何も新しいことはできない。もうチェコスロヴァキアは三流国さ。世界に誇れるものはこのビー

ルだけ。日本の製品はすごいよね。車もカメラも電気製品も最高さ」と続けた。私は男の愚痴を遮った。「日本人の生活もそんなにいいものではないよ。」「そうだろうな。このビールがないからな。水が違うんだよ」と男は苦笑した。

飲み屋での愚痴は、世界のどこでも同じようなパターンで続く。しかし、その中に人々の生活が現われてくる。地域研究者には欠かせない「フィールド・ワーク」である。私は「水の違う」ビールのほろ苦さをもう一杯試してみることにした。ビールの味も庶民の生活も8年前と変わっていないようであった。

ブラハは「百塔の街」と呼ばれるほど多くの尖塔が立ち並ぶ。戦争の被害をそれほど受けなかったこともあり、ロマネスクからのあらゆる様式の建築がオリジナルな姿でそびえている。政府は観光行政に力をいれはじめたようで、中心街の町並みはこの数年で見違えるように修復されていた。しかし、そのため、かつてのようなくすんだ独特の雰囲気は失われていた。

私たちはブラハ郊外の名城カルルシュテインまでのドライブのためにタクシーを雇った。支払いを米ドルですることにしたのでサービスはすこぶるよかった。3,000コルナ(平均の1か月分給与を500コルナ上回る額)かかったという腕の入墨が自慢の人物で、しきりに闇ドルの交換を求めてきた。しかし、それなりの紳士で、また観光ガイドとしての知識も備えていた。途中でヴィシェフラトにある文化人の墓地を訪れたが、彼の解説はでたらめなものではなかった。

神聖ローマ帝国皇帝カール四世(チェコ王としてはカレル一世)の築城したカルルシュテインは中世の典型的な山城で城まではタクシーを降りてかなり登らねばならない。折りからの猛暑は続いており、宮野教授の足どりは重くなってしまった。結局、城門の下のテラスで休憩をとり、ビールと食事をしたのでかれこれ2時間も運転手を駐車場に待たせてしまった。しかし、かれはいやな顔ひとつみせなかった。これも、われわれがドル払いの上客だったからである。

この男も社会主義体制を批判していた。しかしそこには深刻さがなかった。彼は毎日西側の

観光客を相手に稼ぎ、給与の何倍もの副収入を得ているはずである。ある意味で、現体制の受益者でもある。いま東欧でも最も大胆な国内改革に取り組むハンガリーのように、おびただし数の個人営業のタクシーが走り回り、かつ通貨の公式交換レートを実勢(闇)レートに近づけている国では、このようなうま味のある商売は成立しないからである。いずれにせよ、いつの時代でもこの運転手のようにしたたかに生きる人間がいる。これも現在の社会主義諸国のひとつの現実なのである。

ブラハでは多くの友人たちと再会を祝うことができた。ある人は「改革」に期待し、ある人はより根底からの「変革」の必要を説き、またある者はターボルの男のように絶望していた。これらの会話すべてをここで語るゆとりはない。しかし、「体制派」も「反体制派」もこの国を覆う政治的無関心を最大の問題と捉えている点では一致していた。

ブラハの繁華街のひとつ「民族大通り」から北へ路地ひとつ入ったところに「石炭市場」という名の小さな広場がある。ここに「二匹の小猫」という屋号のピヤ・ホールがある。古本屋巡りに疲れた私はここに入った。留学時代によく通った店で、ここもブラズドロイを売りものになっている。ここでひとりの中学校の英語教師に会った。かれとは英語で会話をした。われわれのテーブルには他にふたりの労働者と思われる若者が、まだ3時すぎだというのにもうかなり酩酊していた。中学校教師は話の内容が他人に聞かれることをいやがっている様子であった。

かれはきわめて生真面目な男で、チェコスロヴァキアのおかれていた状況にやはり危機感を抱いていた。しかし、社会主義そのものについてははっきりと肯定的な姿勢を維持していて、ソ連のゴルバチョフを尊敬し、チェコスロヴァキアにも本格的な改革が訪れることを心から期待していた。生徒たちを引率して東独を訪問してきたばかりとのことで、東独経済の効率性を賞賛していた。今、ソ連と東独の間には「改革」

の方向をめぐって対立があるのだが、彼にはそのことについての知識は欠けているようであった。

彼は指導者の若返りが必要であると主張し、運用しだいで社会主義は生き返ると信じていた。そして、西側の人間の目からみたチェコ社会の批判をむしろ聞きたいとさえいった。その言葉に励まされて、私は工業製品の品質、物の供給システム、サービスの問題、等々を日本と対比しながら話した。最近のチェコの新聞もこのような問題を批判的にとりあげるようになっており、私の話は彼にとっても新しいものではなかったはずである。しかし、このような批判に対して、彼は泡の消えかかったビールを見つめながらうなずくだけであった。彼のような知識人たちはチェコの現状をよく理解している。しかし、そこからの出口については具体的な回答を見いだせないでいる。この現実はやはり8年前と基本的に同じであった。

帰国した後の8月20日、つまりソ連による軍事干渉の20周年に当たる日ブラハでは大規模なデモがあった。また10月28日にも反体制派のデモが伝えられた。チェコスロヴァキアも変わりつつある。しかし、それが一部の急進的知識人の動きにとどまっていることも否定できない。多くの人々は今でもブラズドロイを飲みながら、飲み屋で愚痴をこぼすか、あのタクシー運転手のようにせせと毎日の稼ぎにいそしんでいる。

1週間の滞在を終え、一足先にイタリアに向かった教授を追いかけるように私はブラハを後にした。途中、国境近くで頭上のごう音に驚いて列車の窓から外を見上げると、上空で2機の戦闘機が空中戦の訓練をしていた。いく度となく繰り返される宙返りをみながら、改めてここが東西対立の最前線であることを思い起こした。再び国境を越えると売子がビールを売りにきた。そのビールはなまぬるく、チェコの特上のビールをのみ続けていた私にはひどくまずいものに感じられた。